

8. 長崎県・上五島町漁協漁業者グループ

(地域住民参加・雇用創出タイプ)

(1) 背景

① 地域の概要

本グループのある上五島町漁協は、五島列島を構成する中通島に位置している。中通島は面積 168.09 k m²、周囲 269.6 km で、福江島に次ぐ大きな島で、島内には上五島町漁協以外に 5 つの漁協（飯ノ瀬戸、新魚目町、有川町、奈良尾町、浜串）がある。上五島町漁協は島の西側に位置し、奈摩湾、青方湾、道士井湾の 3 つの大きな入江を有している。

上五島町漁協は、冷水、奈摩・網上、青砂、青方、大曾船崎、今里、道士井、浜ノ浦の 8 つの漁村集落から構成される。各集落は農地を有し、自給的な農業も営まれている。

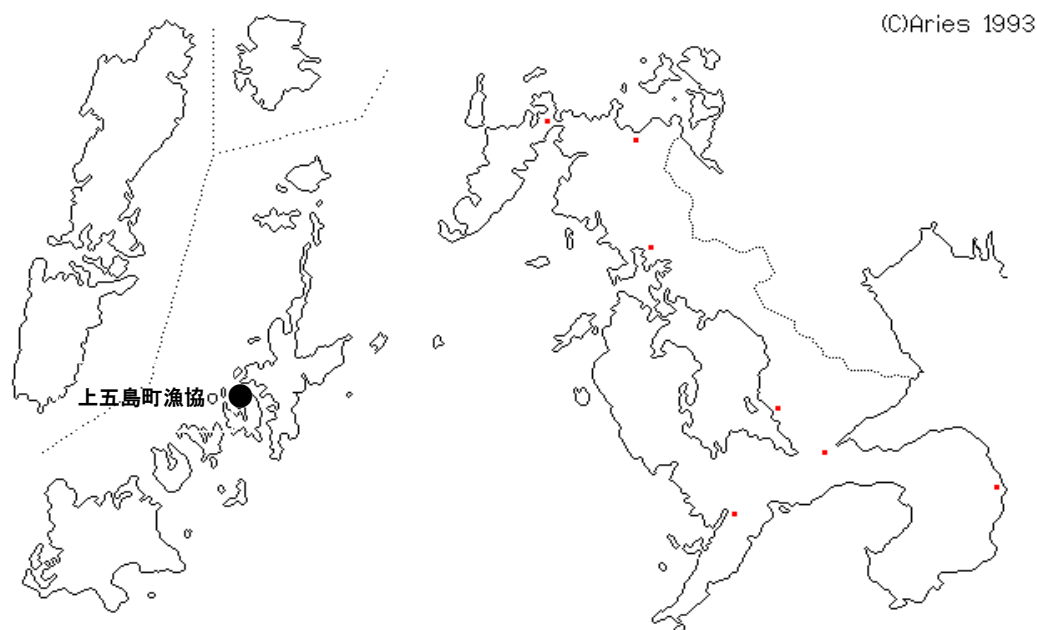


図 3.8.1 上五島町漁協の位置

② 漁業の現状

a. 組合員数

上五島町漁協の組合員資格は一戸複数制である。組合員の資格審査は厳格に行なわれている。組合員数は年々減少しており、平成 22 年 3 月末現在で、正組合員 225 名、准組合員 233 名の計 458 名である。40 歳未満の組合員は僅か 6 名で、過半数が 60 歳以上であり、平均年齢は 60 歳を越える（表 3.8.1）。

表 3.8.1 組合員の年齢構成

	<20歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	>60歳	法人	合計
正組合員	0	0	5	25	62	132	1	225
准組合員	0	0	1	21	56	154	1	233
合計	0	0	6	46	118	286	2	458

「上五島町漁協業務報告書」より作成

b. 営まれている漁業

上五島町漁協で営まれている漁業の概要は表 3.8.2 に示す通りである。最も経営体数が多いのは一本釣漁業である。

その他の漁業にはホコ突き、タコツボ、雑魚籠、シイラ漬けなどの漁業を含む。なお、浅海養殖はワカメを対象としていたが、近年は食植生魚類による食害が激しく、ほとんど収穫できない状態が続いている。

採貝藻漁業はフーカ式潜水で行なわれる。この漁業は兼業で営まれており、16 経営体が兼業している漁業種類は、タチウオ曳 7、ダイビング案内業 2、港湾工事 2、クエ延縄 1、一本釣 1、水産加工（干物） 1、なし 2 となっている。

同じアワビ、サザエ、ナマコを漁獲対象とするホコ突き漁業を営む経営体は 49 で、漁期は 12/21～3/31 が盛期である。ホコ突き漁業者はこの漁期以外は刺網、一本釣を兼業している。

表 3.8.2 上五島町漁協で営まれている漁業の概要

漁業種類	経営体数	操業形態	漁期	漁場	主な漁獲物
一本釣	170	単独操業	周年	周辺	スルメイカ、ヤリイカ、タチウオ
刺網	14	単独操業	8/22～5/19	共同漁業権内の磯場	サザエ、タイ、ヒラメ、イセエビ、インダイ等
延縄	4	単独操業	周年	広範囲	マサイ、アマダイ、イトヨリ、レンコダイ等
養殖	9	雇用	周年	区画漁業権内	ヒラマサ
小型定置網	3	6～8名雇用	周年	共同漁業権内の磯場	ヤリイカ、アジ、ブリ等
中型まき網	1	26名で操業	周年	共同漁業権の外側の沿岸域	アジ、サバ、イワシ類
採貝藻	16	2名で操業	11～12月	共同漁業権内の磯場	アワビ、サザエ、ナマコ等
浅海養殖	8	単独操業	周年	区画漁業権内	ワカメ
その他	22	単独操業		共同漁業権内外	アワビ、サザエ、ナマコ、タコ、シイラ、磯魚類

c. 漁場

上五島町漁協の共同漁業権漁場は「五共同第 16 号」と「五共同第 14 号」の二つである（図 3.8.2）。前者は奈摩湾と青方湾を含み、後者は道土井湾を含む。中型まき網以外は共同漁業権漁場を中心に操業している。なお、青方湾の中央には石油備蓄基地が整備されており、漁業権は消滅している。

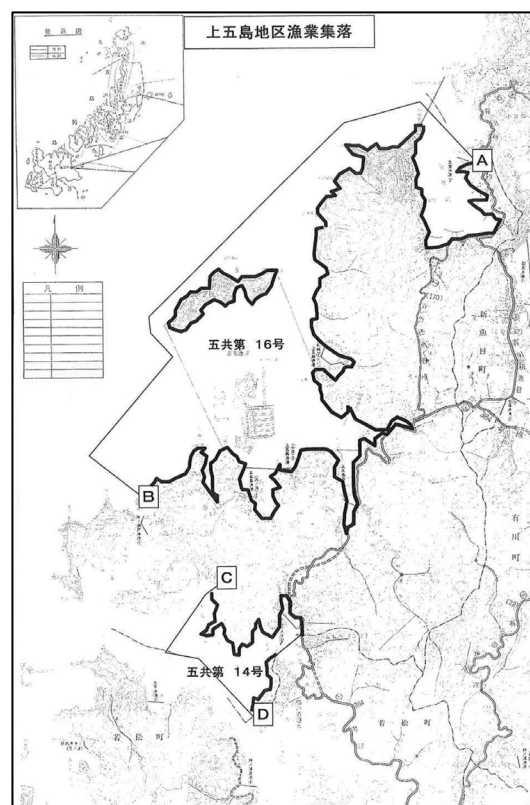


図 3.8.2 上五島町漁協の共同漁業権

d. 漁業生産

最近 10 年間の漁業種類別の生産量の推移を表 3.8.3 に示した。なお、一部は漁協で把握していない漁業種類もあるため、生産量が 100%把握されているわけではない。

生産量は年による変動が大きい、平成 21 年は過去 10 年間で最も低い水準にあった。生産量が多い漁業種類は小型定置網と中型まき網である。これに次いで一本釣、延縄漁業が相対的に多い。

表 3.8.3 上五島町漁協の漁業種類別生産量の推移 単位：トン

漁業種類	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
一本釣	135	99	251	224	145	123	117	150	129	71
刺網	21	31	64	53	23	25	21	11	20	12
延縄	32	41	30	66	47	52	44	47	40	64
養殖	554	347	209	210	183	278	65	50	20	38
小型定置網	235	233	208	222	378	369	265	435	656	371
中型まき網	1,514	601	612	569	742	798	665	515	487	548
採貝藻	87	120	87	65	32	32	65	59	39	12
浅海養殖	13	9	173	10	6	5	14	10	3	3
その他	52	20	40	68	108	258	220	225	163	144
合計	2,643	1,501	1,674	1,487	1,664	1,940	1,476	1,502	1,557	1,263

「上五島町漁協業務報告書」より作成

一方、生産額の推移を表 3.8.4 に示した。生産量は平成 12 年度の 12.3 億円からほぼ一貫して下落しており、平成 21 年は 6.2 億円となり、この 10 年間で半減している。生産量の減少に加えて産地価格の下落が生産額に大きく影響を与えており、地域漁業は深刻な不振に置かれている。正組合員 224 名なので、平成 21 年度の正組合員 1 人あたりの単純生産額は 276 万円に過ぎない。

表 3.8.4 上五島町漁協の漁業種類別生産額の推移 単位：千円

漁業種類	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
一本釣	114,033	98,755	67,472	89,902	109,529	107,942	86,900	112,236	81,552	60,623
刺網	14,510	22,549	24,029	19,851	14,484	15,935	14,300	8,993	9,438	10,406
延縄	29,657	35,195	32,921	47,087	46,062	54,184	40,550	43,980	35,876	42,598
養殖	650,876	440,712	215,216	210,670	199,525	255,610	157,100	82,100	55,792	44,222
小型定置網	129,660	157,540	135,609	145,010	166,870	169,801	149,000	175,200	204,527	139,114
中型まき網	155,744	131,811	133,318	125,365	138,819	116,677	140,000	139,080	129,018	184,250
採貝藻	81,443	94,093	70,885	45,800	37,104	30,150	75,180	62,120	32,772	26,758
浅海養殖	3,157	3,289	7,352	407	982	1,589	166	2,120	836	1,009
その他	47,040	17,623	29,597	50,025	75,953	86,624	99,050	113,000	95,604	108,788
合計	1,226,120	1,001,567	716,399	734,117	789,328	838,512	762,246	738,829	645,415	617,768

「上五島町漁協業務報告書」より作成

③ 抱える課題

a. 漁業所得の大幅な減少

輪番休漁事業は、一本釣、採貝藻（潜水漁業）、ホコ突の各漁業者が取り組んだ。ホコ突漁業は主として冬季に営まれるが、この漁業は刺網や延縄を兼業している。そこで輪番休漁事業に取り組む漁業者が営む漁業種類の最近 10 年間の生産額の推移を見たのが図 3.8.3 である。

4 つの漁業の生産額は平成 13 年度の約 1.6 億円から平成 20、21 年度には半分の約 0.8 億円に半減している。この間、漁業者数は大きく減少していないことから、一人当たりの漁業収入の減少は深刻である。上五島町漁業は離島に位置することから流通面でのハンディキャップを抱えており、後述するように流通コストが生産額の 40% 近くに達することから、漁業所得に減少はより深刻である。加えて平成 20 年度に発生した石油の高騰は燃油や資材のコスト増を招き、漁家は存亡の危機に置かれていた。

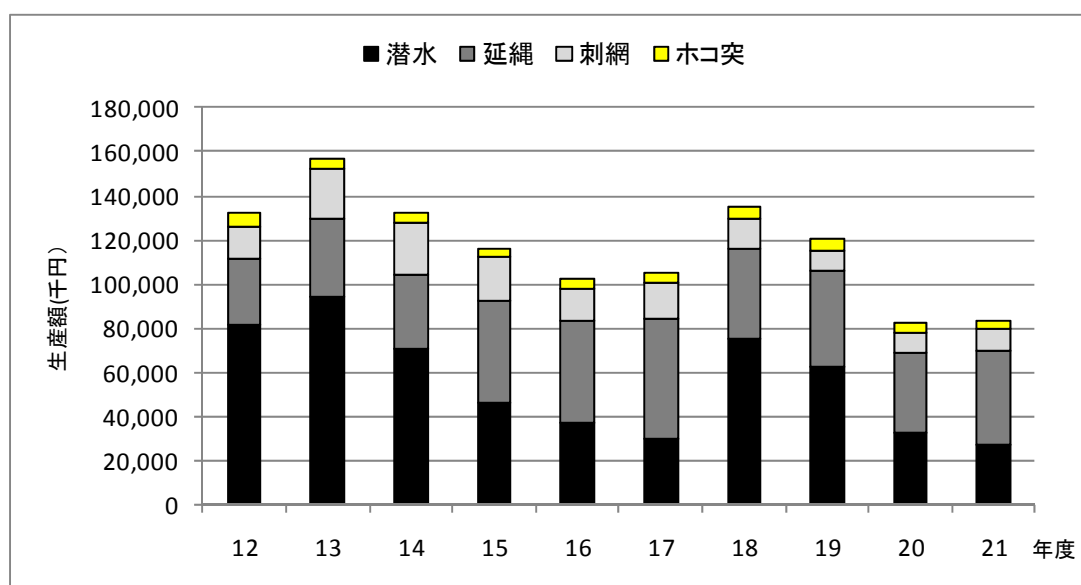


図 3.8.3 輪番休漁に参加した漁業者が営む漁業の生産額の推移

「上五島町漁協資料」より作成

b. 高い流通コスト

離島は水産物の流通面で大きなハンディキャップを抱えている。表 3.8.5 はイトヨリ 5 kg 箱を京都に出荷した時に実際に掛った流通コストを示したものである。

市場でのイトヨリの販売代金 9,800 円であるが、これに漁協出荷経費、漁連出荷経費、島外出荷運賃、消費地市場経費がかかり、流通コストの総額は 4,319 円にも及ぶ。漁業者の受取額はこれらの費用を控除された残りの 5,971 円であり、実際に漁業者に残るのは売上金額の 58.0% に過ぎない。なお、漁協ではこれらのハンディキャップを少しでも緩和するため、上五島の石油備蓄基地に関係する漁業振興基金を活用した運賃助成が行われているが、流通コスト全体の 1 割にも満たない額となっている。

表 3.8.5 上五島から京都に出荷した時に流通コストの一例

経費等		金額(円)	販売額に占める経費のシェア(%)
売上金額	イトヨリ5kg・箱	9,800	
	消費税	490	
	小計	10,290	
消費地市場経費	市場運賃	221	
	水揚料	120	
	販売手数料	566	
	小計	907	8.8
島外出荷運賃	運賃(五島～佐世保)	840	
	消費税等	42	
	小計	882	8.6
漁連出荷経費	漁連鮮魚手数料	213	
	運賃(佐世保～京都)	690	
	水揚積込量	105	
	市場使用料・保管料	165	
	消費税等	48	
	小計	1,221	11.9
漁協出荷経費	漁協販売手数料	304	
	氷代	90	
	抗菌マット	45	
	箱代	870	
	小計	1,309	12.7
出荷経費 合計		4,319	42.0
漁業者の受取金額		5,971	58.0
漁協からの運賃助成金		315	
漁業者の実質受取額		6,286	

「上五島町漁協仕切伝票」より作成

(2) 実施状況

① 取り組んだ背景

a. 磯焼けの進行

潜水漁業やホコ突漁業が対象とするアワビやサザエは藻場に大きく依存している。また、刺網や延縄の対象魚種も藻場に依存する魚種が多い。上述のような生産額の減少は単価の下落によるところも大きい。藻場が荒廃し、磯焼けが進行したことによる生産量の減少が最も大きな影響を及ぼした。

上五島町漁協の周辺海域には多年生、1年生の大型海藻からなる藻場が豊富に分布し、これを餌とするアワビやサザエが重要な漁業資源であった。しかし、21世紀に入ると磯焼けが進み、現在ではほとんど藻場が消失してしまった。とりわけ、クロメなどの多年生の大型海藻はほとんどなくなり、1年生のホンダワラ類が湾奥内でわずかに見られる程度に衰退している。

磯焼けは海藻の生産力と海藻を食べる動物の摂餌圧のバランスが崩れた状態で発生するが、当該海域における磯焼けは、水温の上昇に伴い海藻の生産力が低下するとともに、アイゴやイスズミ等の植食生魚類やウニ類の増加により摂餌圧が高まったことが原因である。

なお、当該海域ではアワビやサザエといった高価な水産物を産出していたことから、男性の潜水漁業者はむき身加工に手間のかかるウニ類はあまり漁獲対象としていなかった。一部、以前には女性を中心にムラサキウニを採捕して瓶詰めなどをつくっていたが、現在では高齢化が進み海にでる女性もいなくなり、その結果、ウニ資源が増大、痩せウニが多くなってきたことからますます獲らなくなるという悪循環に陥っていた。

上五島町漁協では、平成6（2004）年頃から磯焼け対策に取り組んできていたが、これまでの対応は規模が小さく、磯焼けを克服するまでには至っていなかった。

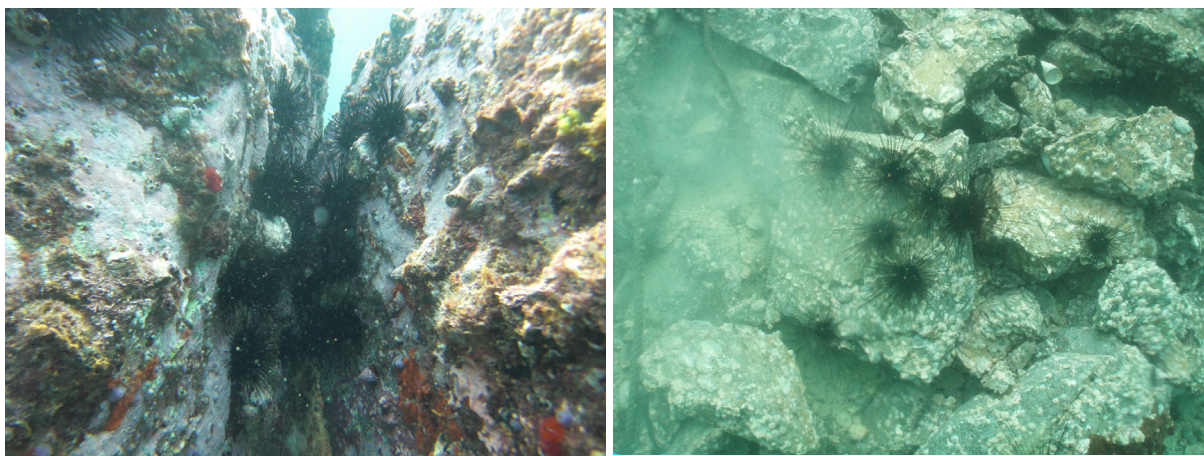


図 3.8.4 ウニ類の食害によって磯焼けになった海底

ウニ類を駆除する以前の現存量の調査結果を表 3.8.6 に示した。各湾の6ヶ所で枠取り調査をした結果である。1.5 m²あたりおよそ30個体以上のウニ類が生息しており、海底には大型海藻はほとんど分布していない状態であった。

表 3.8.6 ウニ駆除を実施する以前の生息密度

海域	食害生物(個体/1.5㎡)		
	ガンガゼ	ウニ類	合計
奈摩湾	26	13	39
青方湾	25	2	27
今里湾	40	11	51
道土井湾	30	4	34

b. 違反操業

密漁対策に取り組んだ背景としては次のような事情がある。このため、これまでも自警船で月に2～3回監視活動を行なってきた。

- ミズイカ釣などの漁業者が磯で密漁者によく出くわしていた。
- 昼間、アナダイやイトヨリを吾智網で漁獲する違反操業がここ4～5年目立つようになった。
- ピカドンという違法操業がイサキ一本釣で目立っていた。

c. 漂着ゴミ

上五島町漁協は中通島の西側に位置しているため大陸からのゴミの漂着が多い。ゴミの約8割は外国からのものである。平成11年頃から国の日韓・日中の海底清掃、監視事業（漁場機能維持管理事業）を通じてゴミ回収に努めてきた。今年度は環境省の事業を活用し、500万円の予算で26日間、重点回収している。



図 3.8.5 上五島の海岸に漂着した沢山の漂着物



図 3.8.6 中国や韓国からの漂着物が圧倒的に多くを占める

② 実施時期

上五島町漁協地区における輪番休漁事業の活動は表 3.8.7 に示すように平成 21 年度に 2 回、平成 22 年度に 1 回の合計 3 回にわたって実施された。平成 21 年度は秋季と冬季、平成 22 年度は夏季であり、事業期間はそれぞれ 3 ヶ月、2 ヶ月、3 ヶ月である。この間に各班別に輪番で休漁し、食害生物の駆除、密漁監視、海底清掃・漂着物回収の 3 つの活動に取り組んだ。各班の延べ取組日数は 460 日に及んだ。このうち磯焼け回復のための食害生物の駆除は 3 回、密漁監視の活動は 2 回、海底清掃、漂着物回収の活動は 1 回行われた。

表 3.8.7 上五島地区の輪番休漁の取組日数

回	実施期間	班数	取組日数	延べ取組日数	活動内容
1	21.09.01～11.30	3	20	60	食害生物駆除
		2	20	40	密漁監視
		4	20	80	食害生物駆除
2	22.01.10～02.28	4	10	40	食害生物駆除
		4	10	40	食害生物駆除
		2	10	20	海底清掃、漂流物回収
3	22.07.01～09.30	3	20	60	食害生物駆除
		4	20	80	食害生物駆除
		2	20	40	密漁監視
			合計	460	

③ 活動場所

輪番休漁事業の活動は上五島町漁協の共同漁業権内で行われた（図 3.8.2 参照）。食害生物の駆除活動は奈摩湾、青方湾、道士井湾の 3 つの湾の湾奥を中心に磯焼けが進む岩礁域で行われた。また、海底清掃・漂着物回収は祝言島周辺の 2 ヶ所、密漁監視の活動は共 16 号、共 14 号内の比較的広範囲で実施された。

④ 参加者

3回実施された輪番休漁の参加者数と延べ活動日数を表 3.8.8 に示した。

輪番休漁は潜水器、ホコ突、一本釣、刺網のそれぞれの漁業に従事する漁業者を中心に非漁業者を含めて実施された。各回の漁業者は重複しているため、実質的な参加漁業者は最も多かったのは第3回の136名である。第3回に参加しなかった人もいることから、概ね150名弱の漁業者が輪番休漁に取り組んだ。ちなみに上五島漁協の組合員数は458名であったので、組合員の約1/3が輪番休漁に参加したことになる。

3回分の参加者数は延べ8,311名となる。

表 3.8.8 輪番休漁の参加者数、活動日数

回	実施期間	班数	取組日数	参加者数			延べ日数			漁業者グループ
				漁業者	非漁業者	合計	漁業者	非漁業者	合計	
1	21.09.01～11.30	3	20	21	11	32	404	208	612	潜水器漁業
		2	20	83	19	102	1655	380	2035	一本釣漁業
		4	20	25	14	39	471	268	739	ホコ突漁業
		9	60	129	44	173	2,530	856	3,386	合計
2	22.01.10～02.28	4	10	28	8	36	277	79	356	ホコ突漁業
		4	10	18	10	28	157	87	244	潜水器漁業
		2	10	55	19	74	524	169	693	一本釣漁業
		10	30	101	37	138	958	335	1,293	合計
3	22.07.01～09.30	3	20	20	12	32	392	234	626	潜水器漁業・一本釣
		4	20	52	17	69	963	318	1,281	ホコ突、刺網、一本釣
		2	20	64	23	87	1,270	455	1,725	一本釣
		9	60	136	52	188	2,625	1,007	3,632	合計

⑤ 取組内容

a. 食害生物の駆除

当該海域の磯焼けの原因は、海藻食性の動物による摂餌圧が海藻の再生産力を上回ったことにあることが今までの調査・研究で明らかになっている。この海藻食性の動物とは、ガンガゼやムラサキウニ等のウニ類とアイゴやイスズミ等の魚類である。因みに海藻に金網を被せることで食害が防除されたことから魚類の食害が原因の一つであることは実証済みである。今回の取組では魚類は除外され、ウニ類が食害生物として駆除の対象となった。

食害生物の駆除は潜水漁業者とホコ突漁業者が二手に分かれて行った。ムラサキウニは水深の深い場所に分布しているため潜水漁業者が、ガンガゼは比較的浅い場所に分布しているためホコ突漁業者が駆除を行った。

潜水作業による駆除は潜水部会の漁業者が通常の操業と同じくフーカ潜水で実施し、ムラサキウニはすかり袋に回収し、漁船に引き上げる方法で実施した。

一方、ホコ突きによるガンガゼの駆除は船上から箱メガネで海底を覗き、通常使用しているホコ突きの漁具を使用して船の上に引き上げる方法で行った。なお、平成21年度に実施した第1回、第2回では水中で潰す方法で駆除していたが、平成22年度の第3回では、海底に籠を沈めておいた籠にホコで挟んだウニを収容する方法で取り上げ、陸上に回収した。回収したガンガゼは漁協の施設で粉砕し、冷凍保存している。粉砕したウニは農家の注文に応じて肥料として配布している。



図 3.8.7 潜水作業によるムラサキウニの駆除作業



図 3.8.8 ホコ突きによるガンガゼの駆除作業

b. 海底清掃・漂流物回収

海底清掃はサデ曳、チェーン道具を曳航してゴミを回収した。回収したゴミ類には延縄や網類などの漁具類が多かった。一方、浮遊ゴミは、フロート、ポリ容器、なかには冷蔵庫もあった。回収したゴミは産廃業者に処分を委託した。

c. 密漁監視

密漁監視は夜間の 8 時間、1 隻に船長含めて 3 人の体制で行われた。

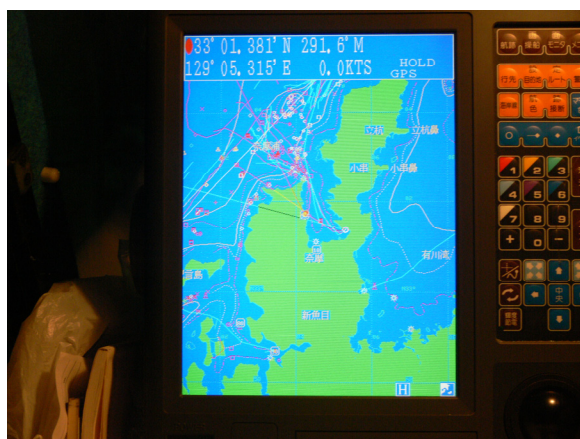


図 3.8.9 密漁監視のレーダーと目視の状況

⑥ 投入費用

3回の輪番休漁事業に投入された助成金とその内訳は表 3.8.9 に示す通りである。なお、その他は保険料が該当する。

3回の活動に投入された助成金の総額は約 180 百万円で、漁業者には 75,802 千円、非漁業者には 27,256 千円の労務費が提供された。また、船舶賃料も 75,369 千円であり、上五島漁協の漁家の経営の下支えに大きく貢献した。

表 3.8.9 投入された助成金とその内訳 単位：千円

回	実施期間	助成金	労務費		船舶賃料	廃棄物処理費	その他
			漁業者	非漁業者			
1	21.09.01～11.30	71,706	31,372	10,614	28,917	0	1,606
2	22.01.10～02.28	28,431	11,880	4,155	11,529	735	1,221
3	22.07.01～09.30	80,833	32,550	12,487	34,923	0	1,744
合計		180,970	75,802	27,256	75,369	735	4,571

(3) 成果

① 活動の一次的成果

a. 食害生物の駆除

平成 21 年度の食害生物の駆除は水中で潰し、陸上には回収しなかったが、平成 22 年度は全量をコンテナに入れて回収し、農業用肥料として活用した。

3 回分の食害生物の駆除実績は表 3.8.10 に示す通りであり、ホコ突グループが回収したガンガゼの総量は約 39 万個、潜水漁業グループが回収したムラサキウニは合計約 39 万個であり、併せて約 80 万個のウニ類が駆除された。



図 3.8.10 回収したガンガゼとクラッシャーによる処分作業

表 3.8.10 食害生物の駆除実績

回		第1回	第2回	第3回	合計
期間		21.09.01～11.30	22.01.10～02.28	22.07.01～09.30	
ホコ突グループ	活動面積(㎡)	19,800	6,100	293,250	319,150
	駆除数(ガンガゼ)	59,400	18,300	315,000	392,700
	駆除量(kg)	測定せず	測定せず	22,546	
潜水器グループ	活動面積(㎡)	15,300	12,350	53,210	80,860
	駆除数(ムラサキウニ)	45,900	37,050	307,000	389,950
	駆除量(kg)	測定せず	測定せず	15,376	

b. 海底ゴミ・漂流物回収

海底ゴミ及び漂流物の回収活動は平成 21 年度に祝言島周辺海域で行われ、20 日間の活動で延べ 693 名が参加し、合計 58.8m³ のゴミを回収した。このうち、漁具廃棄物、冷蔵庫、プラスチック、発泡スチロールなどの人工ゴミが約 50m³、流木や木屑などの自然ゴミが 8.8m³ の内訳であった。

c. 密漁監視

第 1 回の取組では活動中に光力違反船を発見して注意した。第 3 回の取組期間中は実際に密漁船に遭遇することはなかったが、相応の抑止力が働いたものと評価されている。また、活動を通じて不審船を発見した場合の連絡体制が再確認された。

② 組合員の意識改革

漁業者は互いに漁場や漁獲を知られたくないことから通常は漁業者間の意思疎通や情報交換に乏しく、一匹狼的な存在の人が多かった。潜水漁業者は資源管理等の話し合いのためこれまで年に5回程度は会合を開いていたが、一本釣漁業者については一緒に集まって話し合うことはなかった。今回の輪番休漁事業は集落を越えたグループ組織が形成されたことにより、漁業者相互の意思疎通が深まったと評価されている。

輪番休漁は同じ目的をもった漁業者とその家族等が共同作業を行ったことから、仲間意識が再認識され、輪番活動中は浜に活気がみなぎっていた。

また、活動を通じて認識を新たにした点も多かった。これまで漁業者はウニ類の食害によって藻場がなくなるなどとは想像もしていなかったという。最初に磯焼けはウニ類による食害が原因と説明を受けた時、そんな馬鹿な話があるかと信じられなかったそう。しかし、実際に駆除したところに藻場が再生されるのを見て、食害生物駆除の意味が理解できるようになり、漁業者の知識が広がる格好の機会となった。

一方、一本釣漁業者は操業にあたっての光力規制等について比較的無頓着であった。しかし、密漁監視を通じて、光力規制を守っているかどうか注意する立場にたったことから、規制の意味が理解され、自分たちもこれまでの認識を反省する機会になり、組合員の意識改革が促された。

③ 漁協への結集力の形成

輪番休漁事業には漁業者以外に地域の人々も参加したが、参加した人たちに漁協への認識が深まり、購買事業を利用してくれる人も増えた。

④ 漁家経済への支援

輪番休漁事業に参加した人は、刺網、一本釣、採貝藻漁業を営む漁業者とその家族である。これらの漁業は上五島地区でも零細な漁業で、年間の水揚げは多くても数百万円に過ぎない。例えば、一本釣では以前漁獲の中心であったイサキがさっぱり獲れなくなり、サゴシやブリの2～3kgサイズは沢山取れるが、値段が安い。また、イカはほとんど獲れず、以前と大きく変わってきたことが指摘されている。

一方では離島のハンディキャップから高い流通コストが掛っており、漁家の所得はさらに少なくなる。こうした状況に近年の魚価安が加わり、あるいは磯焼けの拡大からアワビ類などの高収入源も減少していることから漁家所得は大きく落ち込んでいるのが現状である。

輪番休漁で得られた収入（労務費＋船舶賃料）は1漁家あたり100万円程度になる。しかもコストはほとんど掛らないことからそのまま所得となる。先に示した通り水揚げの4割は流通コストで消えてしまうことから、輪番で得られた収入は漁獲金額に換算すると170万円程度に相当する。つまり、既存の水揚げ金額に相当する収入が得られたに等しい規模であった。

輪番休漁事業によって収入の見通しがたち、精神的に大変助かったというのが大半の漁業者の感慨である。大げさに言えば、「首をくくらずにすんだ」と感謝の気持ち表現する組合員もいた。一方、輪番休漁により、将来に向けて資源を温存できたことも漁業者には評価されている。さらに、輪番休漁は家計を預かる嫁が一番喜んだという感想も聞かれた。

⑤ 藻場の再生の可能性

上五島町漁協では昔からウニ類は潜水漁業者等の漁獲対象ではなく、漁家の一部の主婦が季節的に採捕していたにすぎなかった。アワビやサザエが豊富で、ウニまで関心が行かなかったのである。したがって、ウニ類の資源量は人為的にコントロールされることはなかった。

ウニ類が磯焼けの原因であることが分かったのでこれまでに年に2日ほど小規模な駆除が実施されてきた。しかし、今回の輪番休漁事業による駆除活動はこれまでとは規模が全く異なるものであった。

ウニ類の駆除によって一部の海域ではホンダワ類の着生が見られるようになり、平成22年春には内湾域にアカモクやホンダワラ類が着生してきた。以前のような藻場に再生されたわけではないが、ウニの駆除によって藻場が再生することがわかり、継続的に活動が続けていくことが重要であるとの認識を活動に参加した人たちが感じているという。

ウニを獲ることが藻場の保全につながるとの観点から漁協女性部ではムラサキウニ、アカウニの加工を始めるようになった。

ただ、冬でもブダイやハリセンボン等を多く見かけるようになり、五島の海が沖縄の海のようになってきたと地元では感じられており、水温上昇は確実である。こうした環境のもとで藻場を再生するためには継続的なウニ駆除の活動が必要と思われるが、輪番休漁事業は現地の重要なニーズに対応する機会を与えたと言える。